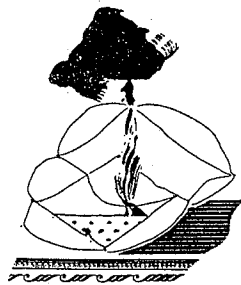


一九七四年七月



古市公威の偉き

金関義則

古市公威は、明治十三年（一八八〇年）、約四年のフランス留学をおえて一〇月二日に帰国し、一月二日には内務省土木局に温かく迎え入れられた。古市が日本を不在にしているあいだに、土木工学科の卒業生が大学からようやく送りだされるようになっていた。工部省所屬の工部大学校が第一回卒業生を送りだしたのは明治十二年一月であった。また、古市や沖野忠雄がかつて入学した東京開成学校は一〇年四月に東京医学校と合併して東京大学と改称され、この東京大学が最初の土木工学科の卒業生を送りだしたのが一年七月であった。東京大学では一四年から医、理、法、文の四学部体制が整うが、理学部なるものの実態は理科工科の混合で、早くから土木工学科、機械工学科、採鉱冶金学科が含まれていた。そこで一八年二月には理学部から、これらの

学科を分離して工芸学部と命名した。工芸学部には、その後新設されていた応用化学科、造船学科と合わせて、五学科が包含された。工部大学校にあって、工芸学部に欠けているのは電気工学科だけで、よく似た二つの工芸教育機関が併立したわけである。そのいずれにおいても、土木工学科の学生はイギリス、アメリカの学習をしていた。

さらに明治十九年三月には帝國大学令が公布され、唯一の最高学府として帝國大学が発足することになった。帝國大学は文科、法科、理科、工科、医科の五大学から成り、工科大学の場合は東京大学工芸学部と工部大学校とを統合しようとするものであった。伝統をことにする工部大学校を円満に工芸学部に融けこませるために、信濃川の治水と取組んでいた古市公威が東京に呼びもどさ

れ、工科大学長の兼任を命ぜられた。古市は、留学以前から世界最高水準の工科大学を日本に実現しようと考えていたから、土木局を辞任して帝國大学建設に専心すべきであったかもしれない。早くから古市の活躍を期待した浜尾新も、工科大学長専任を望んだであろう。しかしながら実際には、内務省の首脳が古市を放そうとしなかったのである。

明治前期に内務省土木局で働いていた外人技師はことごとくがオランダ人であったが、工科系の学問、技術は主としてイギリス、アメリカから導入する方針が明確になり、段々に引きあげていった。明治一六年八月には沖野忠雄も内務省土木局に迎え入れられるに及んで、古市、沖野を中心に土木行政の体制づくりが活潑になった。すなわち、フランスの制度にならい、全国を幾つかに区分して、それぞれに土木監督署をおき、それぞれの責任者（巡視長）に経験を積んだ土木工学科卒業生を任命することを、古市は提案したのであった。この提案を評価して実現させたのは、内務大臣の山県有朋であった。一九年七月二日に土木監督区署官制が定められた。そうして全国が六区に分けられ、第一区は利根川ぞいの関宿、第二区は北上川ぞいの一の関、第三区は信濃川ぞいの西島屋野島新田、第四区は大阪、第五区は徳島、第六区は久留米に土木監督署がおかれた。このとき巡視長になったのは山田寅吉、田辺義三郎、宮之原誠蔵、沖野忠雄、石黒五十二であった。山田、田辺、宮之原は古市に先んじて、それぞれフランス、ドイ

ツ、アメリカに留学し帰国して土木局職員となっていた。石黒は古市、沖野と同様に東京開成学校に入学したが、古市、沖野が仏語を選んだのに対して英語で学習し、東京大学理学部土木工学科の第一回卒業生となった。卒業して神奈川県土木課に入ったが、翌年に文部省から命ぜられてイギリス留学し、一六年に帰国して内務省に入ったが、衛生局と土木局の兼任であった。それだけでなく、一九年から二三年にかけて海軍技師も兼任した。古市は巡視長に任命されることなく、内務大臣、次官、土木局長にとって不可欠の相談相手として、土木行政の体制を推進していった。

古市が示した識見、手腕は山県によって高く評価された。それにして、明治二十年一月から二十二年九月にかけてのヨーロッパ出張で、古市を首席随員に選んだのは大胆至極であった。山県は出張にあたって随員に、任務の遂行と公私の行儀を厳しく戒め、失態があれば即刻帰国させることを宣言していた。酒や女での小さい事故が随員になかったとはいえないが、山県にとっては期待以上の成果をあげることができた。特に古市が品行でも才能でも非難の余地ない秀才であることに、深い感銘を禁ずることができなかった。どんな期待をしても、期待以上のことをやってのけるという信頼を抱いたのである。それなればこそ、翌年の二三年六月、工科系出身者にあたえられることのない土木局長の職務に抜擢され、つづいて九月には最初の勅選議員として、西周、神田孝平、加藤弘之、箕作麟祥、中村正直、西村茂樹、浜尾新、菊池

大鷲、穂積陳重、外山正一と肩を並べて貴族院に送りこまれたのであった。山県に向かつて古市の処遇が破格にすぎると非難しても、古市のかつてフランス留学で交友のあつた秀才がどのようにフランス国政を動かしているかを見てきた山県は、「古市の値打ちのわかるのは私だけだ」と豪語したかもしれない。

古市公威はほんやりと土木局長の椅子にすわっていたのではなかった。帝国大学の土木工学科で育った青年が、土木局なり府県の土木課なりで働くのを見守っていた。河川法、砂防法、道路法、港灣法の草案を検討し作製しても、国会でなかなか成立しそうになかったが、人材の育成だけは怠るわけにはいかなかった。明治二四年、二五年のころには、もはや外人技師がいなくても困らぬ編成ができあがっていた。府県の技師まで網羅できないが、明治後期から大正期の土木事業を指導した顔触れをなるとさなように表示しておいた。

明治三年八月から巡視長は署長と呼ばれるようになるが、古市より古参の巡視長は、すなわち山田寅吉、田辺義三郎、宮之原誠蔵は、全て去っていた。明治二九年四月に河川法が公布され、全国の主要河川の高水工事が華々しく展開されるが、それに備える体制は早くもできていたといえよう。その河川法は古市に指導されて、その草案を近藤虎五郎が研究し用意していたものであった。近藤は若くして矚目され、加藤弘之の女婿となり、各県の土木事業をくまなく抑えており、やがて土木局の指導者として、古

市、沖野の後継者になるものと期待されたが、大正一一年に病没した。

明治三年七月に古市が土木技監、土木局長、工科大学教授、工科大学長を辞任するに先だつて、第一区(東京)、第二区(仙台)、第三区(新潟)を担当する石黒五十二と、第四区(大阪)、第五区(名古屋)、第六区(広島)、第七区(福岡)を担当する沖野忠雄を、三〇年六月に土木監督署技監に任命することに成功するが、古市が土木局を去ると土木監督署技監はたちまちに廃止され、古市の占めた土木技監さえ事実上は消失してしまふのである。石黒はいちはやく三一年一月に土木局を辞任し、その翌日は海軍技監、臨時海軍建築部工務監に任命され、日露戦争に備えて施設建設の重責を負うこととなる。古市、石黒の去つたあとの沖野は、久々に東京に帰つて、古市に代わつて指導の首座にすわるかという衆望にそむいて、淀川治水と大阪築港とにいよいよ心血をそそごうという覚悟を明確にする。思いきつて多数の土木工学科卒業生を採用して、淀川治水と大阪築港の現場に投入していくのである。そうして鍛えられた人材が一〇年の後に、二〇年の後に各地に散つて、それぞれに負わされた土木事業を推進したのであった。昭和期はさておいても、明治から大正にかけて、古市、沖野とその門下がくりひろげた土木事業は、そのほかの多くの理科、工科部門に比較できないような壮観である。そうしてそれらの土木事業と、それに続いて新しく積みかさねられた土木事業とが、

内務省土木局の主要職員 所属、職階、年給(円)、卒業(年次、校名)、職歴の順序で表記した。

年次を示す場合のMは明治、Tは大正、Sは昭和をさす。古市、石黒、沖野、原田、中原以外の人々は卒業した年度に土木局に入ったから、職歴にわざわざ書きこんでない。古市は工科大学長を兼任したので帝国大学の年給500円、工科大学教授兼土木局技師の清水は帝国大学の年給1200円が上掲に加わる。土木監督署長は署長、土木出張所長は所長と略した。

土木局					
局長	古市 公威	3000	M12エコー・サントラル卒, M13土木局, M19工科大学長		
技師	清水 濟	400	M12東京大学(理)卒, M24工科大学教授, M26病没		
〃	妻木 頼黄	1400	M17コーネル大学卒	国会議事堂、主要官衙の建築を管掌する内閣直属の臨時建築局はM19設置、M23に廃止され、左記4名は土木局臨時建築掛に移された。	
〃	河合 浩蔵	1400	M15工部大学校(造家)卒		
〃	吉井 茂則	1000	M16 〃		
〃	船越 欽哉	1000	M16 〃		
第一区土木監督署(東京)					
署長	石黒五十二	2000	M11東京大学(理)卒, M12~15イギリス留学, M16衛生局・土木局, M31海軍技監・臨時海軍工務監, M31退官		
技師	青木元五郎	1200	M13 〃 M40名古屋所長, M44仙台所長, T2大阪所長,		
〃	近藤仙太郎	1000	M16 〃 M39東京所長, T2退官		[T6退官]
〃	大窪 正	900	M21工科大学卒		
技師試補	市瀬恭次郎	700	M23 〃 T2仙台所長, T6調査課長, T8神戸所長, T		
〃	高橋達次郎	600	M24 〃		[13技監, S3病没]
第二区土木監督署(仙台)					
署長	小林 八郎	1200	M13工部大学校卒, M38退官		
技師	近藤虎五郎	1000	M20工科大学卒, M28製図課長, M31技監事務取扱, M35直轄		
技師試補	青山鼎之助	700	M23 〃 [工事課長, M38治水課長・工務課長, M40監理		
第三区土木監督署(新潟)					
署長	小柴 保人	1200	M13東京大学(理)卒, M38新潟所長, M44調査課長, T2退官		
技師	黒田豊太郎	1000	M19工科大学卒		
技師試補	石田 石代	700	M23 〃		
第四区土木監督署(大阪)					
署長	沖野 忠雄	2000	M12エコー・サントラル卒, M16土木局, M38大阪所長, M		[44技監, T7退官]
技師	佐伯 敏崇	1000	M13工部大学校卒, M29第四区(名古屋)署長, M38退官		
〃	西尾虎太郎	700	M22工科大学卒, M31大阪市技師(港湾), M41海軍技師, T12没		
〃	丹羽 鋤彦	700	M22 〃 M32大蔵省技師(港湾), T8退官		
技師試補	三宅 次郎	700	M23 〃		
〃	奥山岩太郎	700	M23 〃		
〃	三池貞一郎	700	M23 〃 T6仙台所長, T13退官		
〃	鶴田 多門	600	M24 〃		[M44下関所長, T7技監, T13退官]
〃	井川喜久蔵	600	M24 〃		[署長, M38名古屋所長, M40調査課長,
[技師	原田 貞介	—	M24ベルリン工科大学卒, M25土木局, M31第四区(名古屋)		[署長, T3退官]
第五区土木監督署(広島)					
署長	日下部弁二郎	1200	M13東京大学(理)卒, M29第七区(久留米)署長, M31第一区		
技師試補	関谷 鈴吉	600	M24工科大学卒		
第六区土木監督署(久留米→熊本→福岡)					
署長	岡 胤信	1200	M13東京大学(理)卒, M31大阪市技師(港湾), M41退官		
技師	長崎 桂	1000	M15 〃		
技師試補	渡辺 六郎	700	M22工科大学卒, M44新潟所長, T13退官		
〃	長尾 半平	600	M23 〃		[T2東京所長, T12退官]
熊本県技師	中原貞三郎	—	M15東京大学(理)卒, M15陸地測量部, M39~41韓国統監府,		
新潟県技師	岡崎 芳樹	—	M22工科大学卒, M44名古屋所長, T6大阪所長, T13退官		

全体として私たちになにもたらしたか。土木学会が創立五〇周年事業として編集した大部な『日本土木史』全二巻をめぐっても、それらの功罪を論議することは甚だ困難であろう。どんなに困難であっても、若い人々にやってもらいたい願ひにかられて、ここに拙文をつづらずにおれない気持になる。

古市公威が工科大学長であったのは、明治一九年五月から三一年七月にかけての約一二年間であった。この間に東京大学工学部の骨格が形成されたといっても過言ではあるまい。工科大学長であると同時に、土木工学科の教授として河川、運河、港湾工学の講義を担当した。しかしながら、二三年六月から二七年六月までの約六年間の土木局長、二七年六月から三一年七月までの約四年間の土木技監、これに加えて二九年二月から三一年七月までの土木局長の兼任にも精励しなければならなかった。正確にいえば、内務省土木局の方が本務で、工科大学の方が兼務なのであった。本務がいよいよ忙しくなると、内務技師の清水清が土木局兼任の教授として講義を担当したが、清水はまもなく病没したため大学はえぬきの助教授を見つけねばならなくなった。それだけにとどまらず土木工学科の教室全体を整備し、充実しようという宿願は、札幌農学校出身の広井勇によって継承された。広井が東京帝大工科大学教授兼北海道庁技師に任命されたのは明治三二年九月のこと、そのときすでに古市は東京帝大を去って通信次官になって

いた。学問意識の強い大勢にさからって、母校出身でない広井を工科大学教授にすることは、古市の決断によってのみ実現できた快挙であった。古市の強い支持があったから、広井は東京帝大出身者に気かねなく土木工学科の教室づくりができた。古市は自ら手をくだすよりも、適材を抜擢することによって、遙かに大きい成果をあげたのであった。

古市の眼に狂いはなかった。それにしても、広井という偉材はどのように鍛えられ、どのようにして古市に着目されたのであろうか。広井勇は、土佐藩士の喜十郎の嫡男として文久二年（一八六二年）に生まれたが、明治三年よりやく八歳になったとき父が病死し、乱世の貧窮につつまれて成人した。たまたま母の義弟にあたる片岡利和が侍従として東京に住んでいた（長く宮中に奉仕して晩年に男爵を授けられた）ので、その書生となって好学の志をみたそりと決心した。一二歳で東京外国語学校英語科下等第六級の入学試験に合格し、同級の宮部金吾と知りあった。英語科が独立して東京英語学校になったが、そこを卒業することを断念し、試験を受けて工部大学校予科に転学した。これも安住することができず、他人の世話にならず官費で勉強できる新しい学校を次々に見つけては受験するのであるが、合格しても規定の年齢にたらず入学できないことがしばしばであった。工部大学校予科に通いつつ、片岡家の食客をやめる機会をとらえようと焦っていた。そのようなときに札幌農学校が工部大学校予科、東京英語学校の上

級生を対象に官費生を募集したのであった。時こそ来たれと勇躍した広井は、応募して入学を許可された。このときの入学生は札幌農学校の第二期生で、同級には内村鑑三、太田（新渡戸）稲造、宮部金吾などがいたが、ようやく一五歳になろうという広井が最年少であったという。明治一〇年七月のことである。翌年六月に級友とともにキリスト教の洗礼を受けた。その入信の動機として自ら語った文章は未見であるが、次のような体験が伝えられている。片岡家の書生として勉強にいそしんでいるとき、腸チブスになり手当てが悪くてついに死にかけた捨て猫のようにになっていた。商用で片岡家に入入りしていたキンドンが、かねて忍耐よくよく勉強な少年として広井をかわいく思っていて、その病状も知るなり早速に引取った。なりふりかまわず夫婦で看病し、神に祈りつつ専門の医者も及ばぬ手当てをしたところ、奇蹟的に助かった、という物語である。そうして広井は今まで思ったこともない歓喜と光明の世界を知って、それより後はどのような苦しみにも悲しみにも耐えようと決心した。広井が入学したとき、すでにクラークは帰国していたが、札幌農学校では思う存分に勉強することができた。教師のなかに土木技師のウィリヤム・ホイラーがいて、講義を聴くたびに土木工学に心が傾いていった。しかし宗教上の信仰では、級中の誰よりも烈しいものがあつた。一四年七月に卒業し、規定によって北海道開拓使御用係に任命され、やがて幌内鉄道の建設に従事することとなった。そのとき手がけたのが橋梁

の設計で、寝食を忘れて完成にこぎつけ、深い苦しみと喜びとをかみしめて、いよいよ志を堅くするのであった。一五年二月に開拓使が廃止されたので、上司の松本莊一郎に従って工部省に移った。日本鉄道会社の東京・高崎間工事の監督として昼は現場で働き、夜は睡眠を惜しむように勉学にはげんだ。

広井は、クラークの人格を慕い、ホイラーの学識に憧れるあまり、どんな困難をも乗りこえてアメリカで土木工学の勉強と実地を身につけようと切念するようになっていた。海外での豊富な経験をもつ松本に決心を打明けたが、それはとても容易でないと受けつけてもらえなかった。広井はめげることなく、決心を堅めていった。一六年一二月、小さな荷物をさげてアメリカに旅立ったとき、友人、知人は驚いてしまった。つまらぬ交際を避けて金銭の浪費を戒め、けちけちと旅費をためこみ、「なんとか貯まったのでアメリカに行つて、働いて学びながら郷里の母と祖母に生活費を送金する」と宣言してのけたからである。黙々とけちに徹底した多年の刻苦の真意が初めてのみこめたからである。

アメリカでの広井の生活を記すのは、二つ三つの断片だけでも胸が熱くなるので省略する。三度の食事を二度にし、一度にしても、節約した金銭を郷里に送りつづけた。そのころ札幌農学校では、農学科に併立して工学科を設けようという意見が具体化して、やがて広井が土木工学の教授となることを期待するようになった。母校のためになるならと承諾したところ、一七〇年四月に在外のま

ま助教授に任命され、三年間ドイツで土木工学の勉強をしてくるようにということになった。カールスルーヘとシュトゥットガルトのポリテクニカムで所定の研究をし、土木技師の学位をもらって二年七月にドイツを離れた。

二年九月、二七歳で札幌農学校教授となり、母とともに暮らすことができるようになった。数多くはなかったが土木学科の学生を厳しく教育して、広井は心の底から満足であった。二六年四月から北海道庁技師を本務とし札幌農学校を兼務するようになった。ところが二八年六月に工学科が廃止されることになり、広井はいやおうなく本務に心魂を傾けるようになった。すなわち、函館、小樽の築港工事である。函館の場合は苦心の甲斐あって予想以上の成績が収められたが、小樽の場合は難航に難航を重ねたのであった。北海道以外の、いわゆる本土の港湾修築工事は、大小の事故が続出して、関係者の気持も萎縮しがちであった。そのようなときに広井は、全力をあげて、最も困難と考えられた小樽築港にぶつかっていった。国費を投ずる価値があるかどうかを調査するために、二六年八月に内務大臣の井上馨が小樽を訪れ、つづいて土木局長の古市公威が訪れた。そのとき古市が広井から受けた感銘は強烈で、薄れることがなかった。心から小樽築港を助成せずにはいられなくなった。儲けるためには鬼をもひしぐといわれた浅野総一郎も、寒風の吹きすすぶ現場に荒るくれの入夫が束になっても退かぬ決心で働く広井に胆をつぶしたのであった。セメ

ントの商売で現場にやっつけてきて、コンクリート技術の改良に命がけになっている姿を見ただけで広井に素直に頭を垂れたのであった。酒よし女よしの浅野などと、信仰のあつい広井は親しくなりたくはなかったが、殖産興業、富国強兵のためには同志として助言を惜しまなかった。浅野を豪傑とたたえる者は多いが、広井の方がもっと豪傑であったのではなからうか。広井が陣頭指揮して築いた防波堤が冬の荒々しい波浪で幾度か崩壊しかけた。風雨をおかして現場にかけつけた広井の形相は、長く語り草となった。そのとき広井はふところの拳銃に指をかけていたという風聞まで残った。もし防波堤が崩壊するならば、立派に自決したであろうというのである。広井以外の豪傑の逸話なら、私は断乎として否定したい。広井は、失敗したとわかればもはや長生きしようと思わない人間に一変したことだけは、確かであろう。

古市にしてみれば、広井が北海道庁の技師として一生をおえるのが惜しくてならなかった。大変な無理をして東京帝国大学に迎えられた広井は、有形無形さまざまな貴重な教訓を残した。しかしながら東京帝国大学に集まった天下最高の秀才には、広井の偉さがよくわからなかったかもしれない。停年に三年ほど先だって大正八年六月に退官したが、「生きている限り仕事はする」という信念で、形式的な停年制にしばられることを拒否したのであった。教授を辞任しても公私の生活は忙しかった。大正一二年九月一日の関東大震災のとき、牛込の広井家は全員無事であったが、

直ちに災害状況の視察に終日かけめぐったのであった。震災の調査報告の作製、震災復興に寄せた意見、いずれも広井の人間としての、学者としての熱い情熱がこめられたものであった。広井は昭和三年一〇月一日に六六歳でなくなった。その日は『英和工學辞典』改訂の編集会議が東京帝国大学の土木工学教室で開かれ、夫人が静養をすすめたにもかかわらず、いつものように会議に参加して午後五時に帰宅した。それから数時間後に、寝床についてしばらくして狭心症の発作で息たえた。それは静かな最後であった。しかも、「生きている限り仕事を」したという意味で、終始一貫の生涯は間然するところがない。

昭和四九年（一九七四年）は、土木学会にとって創立六〇周年にあたる。大正三年九月に土木学会は創立されたが、これは他の学会に比べて遅い。明治一二年に工部大学の卒業生が集まって工学会を結成したときから、最大多数は土木工学科出身であったが、次々に日本鉱業会、建築学会、電気学会、造船協会、機械学会、工業化学会が創立されて退会者がつづき、工学会はやせほればやせほせるほど土木工学者の学会ではないかと思われるほどであった。工学会の機関誌もおのずから土木工学関係の記事ばかり多く、工学全般にわたるものでないとして、工学会はもう解散したほうがよいという意見さえ現われていた。古市公威はじめ土木学界の長老は、土木学会を創立することによって伝統のある工

学会が衰滅することを、懸念せすにはいられなかった。このような情況に対して、やはり土木工学者が独立の学会をもたねばならないという主張も、段々に高まりつづいた。東京帝大工学科にあって、土木工学の研究、教育の水準を高めようとする腐心していた広井勇は、欧米諸国の学界をにらみつつ、土木学会創立運動を積極的に展開した。この運動はなかなか盛りあがらなかった。大阪にあって淀川治水と大阪築港とに取組んでいた沖野は、明治三一年から一〇年間も土木工学科学生に育英資金を贈ったように、かねてから土木工学の振興を願っていて、広井の主張を理解し支持したのであった。

なぜ大正三年まで創立にこぎつけられなかったのか。正面きって学会創立は強行できず、なかなか好機を見つけないことができなかった。土木学界最高の長老である古市も沖野も安政元年（一八五四年）の生まれで、大正三年が満六〇歳の還暦にあたる。後輩の有力者が還暦記念事業を企てて募金を開始した。封建的な親分子分関係の美談を嫌った古市と沖野が、このような行為を受けられるわけがなかった。土木工学科の教授であった中島鋭治、広井勇、中山秀三郎の三名が、せっかくなまとも募金を基金にして土木学会を発足させては、と論陣を張り、古市、沖野を説得したが、結果的には、古市、沖野の還暦祝賀の記念事業として土木学会が誕生したともいえるが、学会の創立については、古市と沖野との間でも早くから意見が一致するわけがなかった。二人

とも工部省や工部大学校とは直接の関係はなかったが、工学会の会長であった山尾肅三を助けて明治三十一年から副会長であった古市は、土木学会の発足によって工学会のやせほそるのは、見るに忍びなかつたのである。

ともあれ土木学会は発足した。そうして誰よりも勇躍した広井は、土木学会をただの親睦機關にしてはならないとばかりに、機關誌『土木学会誌』の充実に心を傾けた。広井の学歴は先にも述べたように札幌農学校、ドイツ留学ということになっているが、アメリカで実地の経験を積み、実情に明るかつたから、日本の土木学会のあり方についてはアメリカの先例から多くのことを学びとっていた。土木学会はすくすくと育つたが、案ぜられたように工学会はやせほそっていった。生みの親の山尾が老衰したので、古市が大正六年から工学会の第二代会長となった。さらに一年には工学会は、個人の会員をもたず、日本鉱業会、日本鉄鋼協会、土木学会、造船協会、建築学会、電気学会、火兵学会、煖房冷房協会、工業化学会、電信電話学会、機械学会、照明学会を会員とする総合団体に改組され、会長は理事長と改名されたが、古市は理事長として病没するまで会務に尽くしたのであった。

工学会は、現在も学会の総合団体として存続している（五五の学会、協会が参加）が、依然として振るわない、工科、理科系の学会が戦後の荒廢で適當な事務所を獲得できなかったころは、多数の貸室をもつビルを建てて学会を入居させては、という名案が

ちこむ」と感嘆している。この一言に励まされて古市は、山県有朋、伊藤博文などを眼中におくことなく、富国強兵、殖産興業の國策に生涯を捧げたように思われる。幼少より藩主の身辺にあつて文武両道にいそしんだ古市が、日本を強大にすることに専心したのは見事というほかない。沖野も広井も日本の富強のために、私利私益を忘れることができたのである。古市が明治三〇年ころから、しきりに辞意をもちやすうになつたのはなぜであろう。京城、釜山鉄道の速成のために、広井のような豪傑をさしむけず、なぜ自ら飛びこんでいったのであろう。明治三〇年一月に英皇皇太后がなくなり、三十二年二月に能樂会總裁の山階宮晃親王がなくなつた。たえがたい悲しみを忘れるために、あえて戦乱の朝鮮に出かけたのではなからうか。三十八年五月の京城、釜山鉄道開通式の日、この日は日本海海戦に大勝を収めた日でもあったが、東京、京都、大阪から京城に招いた演能師とともに古市も久々に舞台を踏んだ。伏見宮博恭王、逋信大臣の大浦兼武などを前にして、どのような氣持で舞いつづけたであらうか。「英皇皇太后がおいでであれば、いつもの御言葉をいだけたであらう」と思いつつ古市もまた、広井と同じように「生きている限り仕事はやめない」と心を新しくしていたかもしれない。

ピスマルクが生涯をドイツ帝國の榮光のために捧げたように、山県有朋は、伊藤博文とともに大日本帝國の富強を願つて献身した。その山県から信頼された古市公威も沖野忠雄も、それから広

提起されたこともあった。有力な学会が次々に自力でビルをもつようになり、もはや貸室業では更生の見込みがない。工学会が発足したころの初心を想起して戦後の再発足をしておれば、放射能分析、人工地氾り実験などで醜状をさらしつづける科学技術庁を黙って見すごしたりはしていなかつたであらう。工業の先進国であったイギリスに一日も早く追いつこうとして、工部大学校に集まつた青年の意気こみを、振りかえつて反省したいものである。六〇の年輪を刻む土木学会にしても、どのような時期にどのような役割を果たそうとして誕生したかを検討することは、けつして無意味な徒事といつておれないであらう。土木学会が発足したとき、古市公威、沖野忠雄、広井勇が、これから育つてくる後継者に、どのような期待を寄せていたのであろうか。土木工學出身の秀才がゴルフや待合政治にうつつを抜かしているのを眺めるにつけ、「古市公威などは古い」とかたづけける未來學者に賛同したり追隨したりするわけにはいかなないのである。

古市も沖野も広井も、高い職位をほしがって粉骨碎身したのではなかつた。沖野と広井は、生涯を通じて勉強に没頭し、わざわざ趣味などにうつつをぬかす必要がなかつたようである。留学以後の古市は、幼少から好きだつた能樂に深入りしていった。しかしながら能樂という趣味は、古市の精神を平静にするのに役立つたようである。能樂を愛好した英皇皇太后（孝明天皇の皇后）が古市の演能をみて、「忙しい仕事もちながら、能樂にもよく打

井勇もまた、富国強兵、殖産興業に粉骨碎身した。そうすることによって、封建的な身分に縛られた多くの庶民が貧窮から解放され、物心ともに富裕な国民となることを、期待したのであった。しかしながら、東アジアから太平洋まで広がつた昭和二〇年に至る戦争は、祖国と国民に何をもたらしたか。それからまた戦後の持続する高度成長が何をもたらしたか。戦後とみに高まつた都市化、工業化が、古市、沖野、広井たちの指導した土木事業を土台に踏まえて展開したことを思うと、明治期の土木史は今こそ新しい視角にたつて省みられなければならない。

古市公威がなお元氣であつた一九二五年（大正一四年）の一月二〇日、平岡定太郎は、郷土出身の偉大な先輩である古市にあやかつて、初孫に公威と命名した。そのころ、大日本雄弁會講談社、小学館などが刊行していた少年むけの雑誌、書籍は、依然として明治期の立身出世思想を鼓吹していた。心身ともに虚弱だつた私には、文武にはげんで出世した物語はうとましくてなじめなかつた。鶴見祐輔の『英雄待望論』や『×××博士雄弁集』を読みふけたと同じ世代の秀才が、かけがえのない生涯をどのように生きたかを凝視するとき、古市の少年時代、青年時代なるものが、かけはなれた偉人の伝記のようによそよそしく読みすぎせなくなるのである。私は日本の土木史を学ぶとき、これからも幾度となく古市公威のもとに戻っていくことであらう。